

取組：高知県英語教育推進のためのガイドラインに基づく取組の推進

- 【課題】・全校種において教科書の言語材料を中心とした授業が多く、学習到達目標の達成に向けた言語活動が設定できていない。
・多くの授業でそれぞれの技能が別々に取り扱われており、実際にコミュニケーションを図る資質・能力の育成に結び付いていない。
- 【要因】・「英語を用いて何ができるようになるか」を明確に示し、児童生徒に見通しをもたせて主体的に学習に取り組ませることができていない。

Plan

■取組計画

「高知県英語教育推進のためのガイドライン」に基づき、小・中・高等学校を通じた英語教育の充実・改善を図る。

■体制

高知県英語教育推進委員会の実施【外部有識者・高知県教育委員会事務局（小中学校課・高等学校課・高知県教育センター・各教育事務所）】

Do

実施内容

「高知県英語教育推進のためのガイドライン（改訂版）」に基づく取組の推進
～主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成～

Check

全国学力・学習状況調査質問紙「英語の勉強は好きですか」 児童：70.1%（全国比+1.8%） 生徒：54.5%（全国比-2.2%）
 CAN-DOリスト形式の学習到達目標 中学校 設定 100% 公表 50.0%（+26.4%） 達成 80.4%（+17.2%）
 （ ）内はR1年度比 高等学校 設定 100% 公表 82.2%（-0.3%） 達成 80.0%（+7.5%）
 CEFR A1 レベル相当以上の英語力を有する割合 中学生：41.4%（R1年度比+4.8） 高校生：40.3%（R1年度比+7.1）

成果の普及

- 研修協力校が作成した計画書・報告書・「CAN-DOリスト形式」の学習到達目標等
<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/gaikokugokatudou.html>
 ■授業と家庭学習のサイクル化リーフレット（県教委作成）

Action

- 【課題】英語学習に対する児童生徒の意欲が学年が進むにつれて減少している。児童生徒の興味・関心を踏まえた言語活動を中心に据えた授業改善が必要である。
- 【方策】授業力（技能統合・ICT活用）向上研修の実施・校種間を超えた教師の学び場の構築



課題

- 本年度当初(5月)児童及び教員外国語意識調査によると、児童「英語の授業で英語を使って発表することが楽しい。」の項目(肯定回答)が、中学年75.4%、高学年84%、教員「言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくりについて理解できている。」の項目が88.3%という結果であった。これは、教員が「目標・指導と評価の一体化」について全体計画と各学年の年間計画・単元計画を構造的にとらえた、目標・指導と評価の一体化への理解が十分でないことにより、児童の意識の高まりにつながっていないと考える。
- 小中連携において、乗り入れ授業等を実施することで児童理解と授業スタイルの継承はできているが、系統性のある学びの明確化・可視化が十分ではない。

具体的な取組と工夫

■ゴールに向けた目的・場面・状況のある言語活動の充実

- ・カリキュラム・マネジメントによる教科横断的な学びを充実させる。
- ・単元のルーブリックや本時のゴールに向かうための具体的な活動を、児童と共有する。
- ・よりよいコミュニケーションを図るための小中9年間の語彙・表現の積み上げリストを作成する。
- ・聞き手や状況を変えることで自己調整を行いながら思考力・判断力・表現力を働かせる場面を設定する。
- ・年間3回、目的・場面・状況のあるパフォーマンス評価を担当やALTとともに行う。



■校内研修の充実【指導と評価の一体化に向けて】

- ・担任が「Let's Talk ノート」(授業計画、形成的評価の記録、授業の振り返り、板書の写真の記載及び添付)を全教職員で交流する。
- ・実際の単元を取り上げ、全体計画の位置付け及び学年の年間計画・既習表現(これまでの学年とのつながり)、評価規準を共有したうえで、言語活動(案)を全体で検討する。
- ・高学年のSmall Talkに、校内の教職員等が登場することで、教員自身が相手意識をもって自分の思いや考えを伝える体験をし、単元ゴールの目指す児童の姿を知る。
- ・授業後に推進教員と児童の姿から振り返り、次時の授業に活かす。
- ・小中合同指導案検討会の実施。(小学校:推進教員、校内外国語担当教員、授業者 中学校:外国語担当教員、管理職)

成果

■相手意識をもった「話す」力の向上

児童が聞き手や状況を変えて言語活動を繰り返し行うことで、自己調整をしながら内容を工夫し、思考力・判断力・表現力を働かせる姿が見られるようになってきた。

■授業づくりの工夫

教員意識調査の「言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくりについて理解できている。」が、肯定評価が年度末調査では100%となった。これは、校内研修、3回の授業研究会等を通して、教職員自身が見方・考え方を働かせて自分の思い考えを伝える体験を重ねたこと、教員の日々の指導と児童の変容、講師などによる実践の価値付けにより、学習指導要領で目指す資質・能力を授業実践から学ぶことができたからだと考える。

■小中連携

「話すこと」の観点で、小中の語彙・表現のつながり、内容のつながりに視点を置いて、小中合同の公開授業研究会を実施することができた。

課題及び改善案

■課題

教員が単元ゴールに向かうことに気持ちが行き過ぎて、本時の付けたい児童の姿を見失うことがある。児童に伝えたい内容はあっても、丁寧な語彙・表現の指導が不十分であり、児童が英語でコミュニケーションをとることに喜びや達成感をもつことができていない。

■改善案

- ①既存のルーブリックを児童自身が立ち位置やゴールに向けて絶えず自己調整できるように改善することで、教員も児童の様子をとらえた丁寧な指導につなげる。
- ②小中の研究主題の統一を図り、9年間を通した「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標を見直し、小中接続がスムーズに行えるようにする。また、よりよいコミュニケーションを行うために語彙・表現の積み上げリストを、小中で活用する。

課題

英語を使って伝え合う喜びを感じ、学習内容を理解し、進んで学習に参加できる児童を育成することを目指しているが、個人差が大きく、話すことに自信がない等、気持ちを伝えることに課題が見られる。また、英語で授業を進めることに課題を感じている教員も見られる。
【教員への意識調査】「英語に対する苦手意識を感じていない」:25%

具体的な取組と工夫

■必然性やリアリティのある場面設定

オーストラリアの姉妹校との遠隔授業や交流及びCIR・他校のALTとの交流等を通して、外国の文化に触れる場面を設定し、コミュニケーションのツールとして実際に英語を使う体験を増やすことで、児童が意欲的に学習に参加できるようにした。



他国の文化に触れるためのALTとの交流

■ICTの活用による丁寧なフィードバック

タブレットを積極的に活用して、モデルとなる指導者の発表等を録画し、児童が必要に応じて視聴できるようにしたり、児童が学習状況を録画してそれを指導者に提出させたりすることで、学習の段階ごとに指導者からフィードバックを行った。また、ロイロノートのテスト機能を使って習熟度を確認しながら授業を進める等の工夫を行った。



英語力向上研修における言語活動の体感

■メンター制を活用した研究体制の構築

高知市教育委員会指導主事等を招聘し、教員自身が言語活動を通して楽しみながら簡単な英語で伝えてみる英語力向上研修や模擬授業研修会を年間15回行い、全教員で学びを深めた。

成果

■【児童用意識調査】

「英語で発表することが楽しい」 R2:83%⇒R3:92%
「英語で聞いたり話したりすることが楽しい」 R2:78%⇒R3:98%

■ICTを使って丁寧なフィードバックを行ったことで、自分の英語に自信をもつことができ、積極的に発言できるようになった。

■【教員用意識調査】

「英語の授業を児童と一緒に楽しんでいる」:100%

課題及び改善案

■「英語の授業があまり分からない」と回答した児童に対して、学習状況を捉えた確実な手立て・支援を行う。

■教員が英語力向上研修による学びの成果を感じており、次年度も、一層授業で使える実践的な内容になるよう更に工夫し、指導への苦手意識を払拭できるよう研究を進める。

課題

- ・児童が英語を通じて積極的にコミュニケーションを図ることに重点をおいて研究を進めているが、「話すこと[やり取り]」で既習表現を活用することや、相手意識をもって発表することに課題があり、資質・能力の育成に向けた言語活動の工夫が必要である。
【英語4技能検定GTEC Junior 2】令和2年度6年生:話す力正答率76%

具体的な取組と工夫

■児童の興味・関心を大切にした授業、単元展開

目的・場面・状況が明確な言語活動を設定し、主体的にコミュニケーションを行うことができるように、児童が伝えたいと感じるような単元ゴールを設定した。場面設定を明確にすることで児童が学習の成果を実感できるようにした。

■中間評価を視点とした授業改善

全学年が校内で研究授業を行い、事後研修では言語面や内容面における中間評価が適切だったか等の視点で、言語活動と中間評価後の児童の変容を見取った。

■地域の素材を生かした単元計画

5年生の学習では、教科書の学習から発展させ、高知市のALTを招聘し、地域のことを紹介することを通して、児童が英語を使う必然性のある言語活動を行った。



中間指導のイメージを
全校で共有



事後研修にて場面設定
について協議



ALTに地域の歴史的な
よさを紹介

成果

- 目的・場面・状況を明確にした単元ゴールを設定できたことで、継続して児童の肯定的評価が高かった。

【児童用意識調査】「英語を使って友だちや先生と会話することが楽しい」 R2: 82.9% → R3: 94.8%

- 授業研究を重ねていく中で、目的・場面・状況が明確な言語活動の時間を増やし、教師が中間評価を適切に行うことで、自分の思いを英語で伝えようとする児童が増えてきた。

- 「坂本龍馬の生まれた町」という地域の特色を生かした単元指導を行うことで、児童にとって身近な題材が自然なコミュニケーションにつながった。

課題及び改善案

- ALTとのやり取りの中で、聞いたことに対して即興で反応したり、さらに質問したりして会話を楽しめた児童は一部である。これまでの学習や経験で培った話す力・聞く力を駆使し、自分の力で質問したり答えたりできるよう、児童の実態に応じた支援を行う。

- 各単元では学習した語彙や表現を使えるが、別の場面で活用するまでには至っていない。目的・場面・状況のある言語活動と意図的な中間指導を繰り返し行いながら、児童が既習表現を更に活用できるようCan-Doリスト等の見直し、見直しをもって系統的な指導を行う。

課題

- ・《児童》自分の思いをもていないことと、相手意識をもって発信する力が弱い。
 (「英語で自分のことや意見を発表することは楽しい」の項目において肯定的回答は79.2%で、他の項目よりは低い。)
- ・《教師》明確なゴールイメージがなく、評価規準があいまいなため、子どもの評価が十分にできていない。

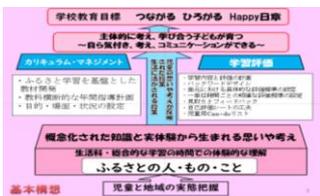
具体的な取組と工夫

■基本構想図による教職員の共通理解

教員によって「目指す子ども像」の視点が異なっていたため、基本構想図を作成し、教職員で共通理解を図った。本校の児童等の実態、これまでの取組等を踏まえ、児童が「伝えたい」「楽しい」と主体的に学習に取り組めるように、定期的に複数の教員で教科等横断的な視点での単元構成を見直した。



「コミュニケーションのできる子ども」の具体像についてグループで協議する様子



本校の研究における基本構想図

■単元、一単位時間ごとに学習到達目標を明確にし、指導計画を作成

単元ごと、一時間ごとの指導計画に、評価規準、目的・場面・状況、目指す発話例(英語表記)、言語活動の目的や内容、評価場面で取り上げる児童の姿等、なるべく具体的に記述するように努め、授業改善を図った。また、観点別評価に偏りがないよう年間評価計画表を作成した。

■学習評価の在り方についての演習型研修の実施

模擬授業等を通して、児童に付けたい力、評価規準に沿って中間評価で取り上げる児童や、児童の意欲を高めるための評価や発問、どこをブラッシュアップさせるか等について協議を行い、評価規準に沿った見取りと評価について研修の充実を図った。また、4年生以上の児童については、一時間の授業で児童が何に気づき、思考を働かせていたかわかるように、振り返りシートの改善を行った。

■外部講師を招聘しての研究授業からの学び

「児童が表現する上で必要になる言語材料をあらかじめ教員で想定しておく」という助言を受け、事前に必要な語句や表現を選定し、タブレットにALTが音声を読み込み、児童がいつでも必要に応じて参照しながら練習できるよう工夫した。

■ICTの効果的な活用

- ・発表資料としてICTを活用させる取組
- ・発話を録画して自身の発話を振り返り再構築させる取組
- ・意見を共有したり学びの履歴を振り返ったりすることにも活用
- ・パフォーマンステストにも活用するなど、評価に活用

成果①

《児童》児童意識調査より

| 項目 | R 2 | R 3 |
|-------------------------|-------|-------|
| 英語で自分のことや意見を発表することが楽しい。 | 79.2% | 81.3% |

■単元ゴールにおける言語活動の設定について、他教科等と関連付けながら単元計画の作成を行うことで、児童の「伝えたい」という学習意欲を引き出すことができた。

成果②

《教師》

■単元ごとに評価規準と目的・場面・状況を設定し、単元ゴールを決め、逆向き設計で単元構想を練ることにより、児童にとっても指導者にとってもゴールまでの見通しがもてる単元計画となった。

■見取りと評価について、模擬授業、研究授業や授業分析、事後の協議を通して、「評価規準に沿った児童は具体的にどんな姿なのか」、「どんな発問や励ましで価値付けていくのか」等の研修を重ねたことで、授業者の意識を高めることができた。

課題及び改善案

■課題

評価規準や単元計画の見直しが不十分なため、指導と評価も曖昧になり、児童の学習意欲を低下させている。そこで、ゴールイメージをもって評価規準を明確にした指導力の向上が課題である。

「必然性」や「コミュニケーションの意義や楽しさ」を実感させる単元構成ができていないため、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動ができていない。

■改善案

授業研での実践研究や動画視聴をすることにより、目指す授業イメージの共通理解を図り、指導力の向上を目指す。

児童が「伝えたい」という思いをもって主体的に学習に取り組めるよう、今後も他教科等との関連を図る。地域の資源を活用した単元計画を見直し、授業実践をしながら、PDCAサイクルで工夫改善を加える。